令和７年２月20日 発行
通巻 第 555 号 2･3月号

令和６年度

鹿児島の教育

2･3月号

巻頭言

教員の資質向上は、自信と誇りをもたせることから

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部会長
出水市立米ノ津中学校長
湯之前 学

教員の資質の向上を図ることは、学校教育の質を高め、生徒の学びを支える基盤である。校長はリーダーとして、教員一人一人が成長できるよう支援し、学校全体の教育環境を充実させる役割を担っている。

教員の資質の向上を図るためには目安となるものが必要であるが、その目安は「かごしま県教員等育成指標」である。指標には、高度な専門職として職責、経験及び適性に応じて身に付けるべき資質がまとめられている。

その教員育成指標が最初に策定されたのは平成二十九年十二月であった。策定の経緯は、文部科学省が中央教育審議会の答申を受け策定した「『次世代の学校・地域』創生プラン」に「教員の資質向上改革」が示されたからである。さらに「職責・経験及び適性に応じて身に付ける資質の明確化」の提言がなされ、教育公務員特例法の一部が改正され、各都道府県で教員育成指標の策定が義務付けられたのである。

私は、本県の教員育成指標の策定に運よく関わることができ、文部科学省の説明会にも参加することができた。その会の説明で、印象に残ったことが、育成指標は、教員の目指すべき資質・能力を単に示すことだけでなく、「教員は誰でも簡単になれる職業ではないこと」、「それぞれのステージでしっかり力を身に付けていなければ続けられない職業であること」を、教職員にはもちろんのこと、保護者を含めた世の中に対して教職の専門性を示す目的もあるという話であった。校長となって、今でもその言葉が強く心に残っている。そのため教員には、まず、教員という職業は誰にでも容易に務まるものではない高度な専門職であるという自信と誇りをもってもらいたいと考えている。次に、教員の資質を高めようとする際は、育成指標を活用し、教員個々の弱みや課題を焦点化するのではなく、強みを一緒になって明確にし、その強みを更に伸ばすことに重点をおき、役割を与えたり、助言を行ったりすることが大切だと考える。教育現場は複雑で多様な課題があるため、教員一人一人が全ての資質・能力をもつことは難しいことである。教員同士が互いの強みを生かして協力することで個々の弱点を補い合い、資質の向上が図られ、教育活動を一層充実させることができると考える。これこそが「チーム学校」であると捉えている。私もこれまで多くの人に支えられてきた。管理職となった今、教職員個々の強みを把握し、個性の伸長が図れるように学校経営を行っていきたい。

令和７(2025)年 2･3月号
一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679
(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

＊おもな内容＊

巻頭言 …… 1
随想 …… 2
提言 …… 3
わが校の学校経営 …… 5
子どもが輝く教育 …… 7
心に残るひとこと …… 9
ある日の校長講話 …… 11
話のひろば …… 13
読書案内 …… 15
趣味・文芸 …… 17
郷土の紹介 …… 18
専門部だより …… 19
編集後記 …… 20

随想

「決心」で受け継がれる伝統行事、高山流鏑馬

高山流鏑馬保存会会長　有馬大作

わが町肝付町で、約九百年にわたり受け継がれている伝統行事「流鏑馬」。全国に残る武芸や競技としての流鏑馬とは異なる、古式にのっとった儀式です。開催日は、昔は十月十九日の四十九所神社大祭の日でしたが、現在は毎年十月の第三日曜日に開催されます。全国的に成人の射手が多い流鏑馬ですが、高山流鏑馬は、毎年中学二年生が務めます。八月の中旬に射手を選考し、馬に乗るところから始まり、約五十日間の練習を経て本番を迎えます。

射手を務める少年は、町一番の大役を任され、受ける重圧は計り知れません。多くの方々に支えられ、様々な教えを受けて大きく成長していきます。狩衣装束にあやい笠を身にまとい、弓受けの儀により神の使いとなった射手は、神馬と共に、約三百三十メートルの馬場を三回疾走し、合計九本の矢を放ちます。引手の掛け声と共に駆け出し、馬の蹄の音と威勢の良い射手の掛け声のみが馬場に響き渡り、観客を含め周囲はまるで時間が止まったかのように、射手と馬だけが時間を感じる瞬間です。

当日は数千人の観客が来場されますが、馬の足音と矢が的に命中した音が共鳴した瞬間、神社の杜に大きな歓声が上がります。的に矢が当たった数が多いほど良い年になるとされ、国家安泰、五穀豊穣、悪疫退散を祈願する年占いの儀式で、今もこの願いは込められています。

私がこの流鏑馬に出会ったのは、平成二十一年七月、暑い夏の日のことでした。当時の保存会の会長から私の二男に「今年の流鏑馬の射手を務めてくれないだろうか。」と依頼がありました。きっと希望者がいなかったのでしょう。早速息子に話をした時は少し戸惑っていましたが、数日たって、決心したらしく「射手になる。」と私に返事をしてきました。この地域で流鏑馬の射手になることは、大変名誉なことであると同時に、責任重大なことは十分かっていたので、私も少し考えさせられました。最終的には自分で覚悟を決めた息子を全力で応援しようと家族で心を決めて約五十日間、親子共々頑張りました。息子としては、期間中、沢山の試練もあったと思いますが、無事に大役を務め終え奉納することができました。重圧に耐え、やり終えた息子を見た時には、自然と涙が溢れ、彼を誇らしく思いました。

現在、十五年間保存会に携わり、令和四年には保存会の会長に就任し、今年で三年目になります。今も途絶えることなく伝統を継承し続ける高山流鏑馬。息子が射手になることを決めた時と同じく、責任と重圧を感じながら就任したことを思い出します。

流鏑馬は、射手を選考することから始まり、六月に入ると、町内（高山地区）の中学校に募集をします。希望者があった場合は、選考委員会を開き、候補が決定し、射手のご両親に正式に挨拶に行き、親の承認を経て初めて射手が誕生します。誰も希望者がいない場合は、各方面にその旨を伝え、推薦をお願いしますが、今年はまさにその年で選考に苦労しました。結果、高山中学校の武田創（たけだはじめ）君が射手として決定しました。最後まで家族で悩んでいたようですが、周りからの応援もあり、やっと決心して最後は立派に奉納してくれました。お陰で今年も大切な伝統を守ることができました。そこには、保存会員、応援してくださる地域の方々、そして指導してくださる先輩方があり成し得たことですが、それより、中学二年生の少年が不安な気持ちを抱えながらチャレンジしようとする、強い「決心」があったことを忘れてはいけません。また来年も伝統を守るために射手になる少年が「心を決めて」頑張ってくれることを願っています。

略歴

平成二年　中央大学卒業
平成九年　高山剣道道場代表就任
平成二十一年　高山流鏑馬保存会入会
令和四年　高山流鏑馬保存会会長就任

若手教員を育てる

錦江小（姶伊）　中熊豊仁

若手教員が自ら校長室へ足を運んでくれることが多くなってきた。敷居が高いと感じていた部屋も相談等で何度も足を運ぶうちに入りやすくなったらしい。うれしいことである。

●若手教員の置かれている状況

世の中は人手不足であり、教員も含め、若者の離職率は増加傾向にある。人材採用市場が売り手市場であることや現代の若者気質が要因として挙げられることが多い。なぜ教員になったのかという問いに「コスパがいいから。」と答えた教員がいたとかいなかったとか、真偽は不明だが噂として聞いた話である。

情報の氾濫や価値観の多様化による社会の変化は、人と関わり人を育てる職業である教員の心理的負担感を増大させた。特に、子どもを含めた保護者との関わりは、判断や対応を少し誤れば事態が複雑化し、学校全体が疲弊する。経験豊富な教員でさえ例外ではない。不機嫌な顔をして叱れば終わりという指導はもう通用しない。若手教員が採用後早期に身に付けることを求められている資質・能力は一昔前より多いのである。決してコスパやタイパがよいとは思えない。

加えて、採用者数増減の巡り合わせで今、中堅教員が少ない。つまり、日常的に「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやる」役割を担う教員がいない。私が新採時代、年齢が比較的近い再配や再々配の先生方は憧れの存在であった。厳しさも温かさも有難かった。コスパやタイパなど無縁で、目の前の子どものことだけを考え実践する先輩たちに多くを教わった。

●教育の不易・目的と若手教員の育成

価値観の多様化や働き方改革は、学校に大きな揺れをもたらし、若手教員はその真っ只中にいる。教育の不易や目的がおざなりにされることで揺れは増幅する。「大変だから。」と目的や意義・目標、実態を吟味せず方法ありきで語り、教育活動をスクラップしていく例を見聞きする。

学習指導も生徒指導も本質は同じである。目標を立てること、それは、教師と子ども、さらに保護者と共に目指す子どもの成長した姿である。この子をこう育てたいという思いや願いがあって初めて何をすればよいのかが考えられる。その上で、優れた教師は、子どもやその成長のプロセスに寄り添い、研究・実践を重ねる。だから、子どもたちは上辺だけではなく真に成長する。

私も若い時分は、目に見える方法を追いかけた。それは、目の前の子どもの成長の道筋を意識したものではなかった。目の前の問題を早く解決したい自分が手っ取り早く使えるものであったからであった。しかし、それは対症療法でしかなく、問題の真の解決にはつながらなかった。

方法よりもまず教育の不易や目的を問い直し、個々のビジョンや目標に近づく教育活動を考え実践すること。そして、子どもの真の成長を実感すること。若手に限らず理解がそう簡単ではないことを感じているが、このことを繰り返し経験させることが、教育の本質を理解することの、ある意味、コスパやタイパにつながると思う。

●若手教員育成への挑戦と自らの新たな学び

中堅教員のいない今、ベテランを巻き込みつつも、若手教員を直接的に育てる中心は管理職であると思っている。今育てなければ十年後の学校はどうなるのだろうかという危機感がある。「管理職ではなく一先輩教師として育てるからね。」私はそう宣言して、教頭と共に校長室を研修室として、日々相談・指導助言を行っている。必要に応じて授業に入り指導技術を伝え、日々の学級経営については教師の思いや学級目標と個々の実態、指導方法の関連から語り合う。特に、生徒指導問題については全て一緒に検討・対応し、望ましい対応法を学ばせるようにしている。

最近、チル&ミーという言葉が登場した。Z世代の特徴だそうである。リラックスしてマイペース&自己承認欲求が強い。ペースを乱されるのは嫌だけど認められたい。ただ、色々なタイプがあるらしい。私たちは様々な課題の解決とともに、若手への関わり方についても新たな学びが求められている。今の四、五十代が最も割に合わないという記事を目にした。それでもやはり、先人や実践から学んだとおり「教育とは流れる水の上に文字を書くような儚いものだ。だが、それを岩壁に刻み込むような真剣さで取り組まなくてはいけない」。コスパやタイパの考え方の使い道を誤ってはいけない。日々口角を上げることを意識しつつ、若手教員の育成に努めたい。

主体的に取り組む授業改善を目指して

鹿屋中（隅）　永里　護

一　はじめに

本校は生徒数三百四十九人、職員数三十人（市費含む）、通常学級九学級、特別支援学級四学級、計十三学級の中規模校である。また、通級指導教室も開設している。さらに、新規採用の教諭から経験豊富な教諭まで全職員が何事にも意欲的に取り組む学校である。

二　組織で取り組む学力向上

本校は、県総合教育センターの研究提携校として、毎年、研究・実践のテーマを掲げ、教育活動に取り組んでおり、その成果の一端をオープンスクールとして公開している。本年度は「よりよい未来を創り上げようとする生徒の育成～生徒と共に取り組む授業改善と学力定着を目指して～」のテーマの下、三か年計画で教師と生徒が一体となって日々の実践に取り組んでいる。

年間を通した取組内容として、「五つの共通実践（基礎・基本の確認）（先読み・声出し）（学び合い活動の充実）（自分の言葉で説明）（一問のチャレンジ）」を各教科共通実践事項として日々の授業で行っている。全ての教科で共通実践事項を基にした授業を展開することにより、基本的な学習過程の確立につながっており、生徒も学習の流れを理解し、見通しをもって学習に取り組むことができる。また、毎月第三週を「お互いの授業を見る週間」と位置付けて取り組んでいる。指導案等は作成せず、日頃の授業を展開する中で参観シートを基に気付いたことや改善すべき点、参考となる点等を記入し、相互に情報共有している。参観時間も五十分全てではなく、学習課題の設定場面や学び合いの時間帯、振り返りの様子など、各自の学びの視点で参観するようにしている。

三　生徒と共に取り組む学力向上

本校の学校教育目標を「気付き、考え、実行する生徒の育成」とし、全教育活動を行っている。中でも、生徒会活動の活性化を重視して取り組んでおり、学力向上に関する取組に力を入れている。その一つとして、生徒会学習図書部（学びリーダー）を中心に運営する「アクティブチャレンジの時間」がある。この活動内容・目的は、毎日取り組んでいる「アクティブノート（宅習帳）」を相互に閲覧し、参考になる取組を共有し、どのような工夫がされているか等の意見交換を通して、自己の改善に結び付け、家庭学習の充実を図ることである。また、この活動は、異学年集団で取り組んでおり、下級生は上級生と関わりながら活動することで参考とすべき事項を多く得ることができる。加えて、取り組んだ結果を基に、ノートの書式や教科の枠の増減など生徒自身が考え、次年度のノートについて検討している。さらに、この学びリーダーの取組として、年二回、授業評価シートを用いて、本校職員の研究授業を参観している。参観終了後には生徒の側から見た授業の感想や意見を教師へ伝え、職員は授業研究時において、その感想や意見等を基に協議している。

生徒の感想・意見の中には「学び合いの時間が少し長かったような感じがした。」、「○○の説明はとても分かりやすかった。」などがあり、授業づくりの改善の視点として大変参考になっている。

四　おわりに

年度当初の校内研修では「一年を通してどのような生徒を育成したいか」という内容で協議し、生徒の姿を全職員が同じイメージをもってスタートしている。そして、各教科は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を進め、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、日々、自己研鑽に努めているところである。今後も計画的な日々の実践を重視し、学校全体で主体的に授業改善していこうとする気運の醸成に努めていきたい。

極小規模校における「主体的・対話的で深い学び」により自ら「学びに向かう力」を培う児童生徒の育成

手々小中（大）　廣　瀬　孝　一

一　はじめに

本校は徳之島の最北部に位置し、児童数三人、生徒数二人の小中併設の極小規模校である。眼前には美しい東シナ海が広がり、校舎の立地部分から下段の校庭部分まで一気に滑り降りられる長い滑り台は、何度もテレビで紹介される等、徳之島の観光スポットでもある。一方で地域の過疎化と高齢化は本校にも深刻な影響を与えており、平成四年度から留学制度と特認校制度の運営を継続している。本年度は小学生一人、中学生一人が県外から留学生として通学している状況にある。

二　極小規模校の特色を生かした教育

日常の学習指導は、児童生徒一人一人の実態に応じたきめ細やかな指導が可能である一方で、「主体的・対話的で深い学び」を十分に実践するには困難な状況にもある。このことから、町教委の支援や関係機関等の協力により次のような実践を行っている。

㈠　遠隔授業を通した交流

小学校の国語、社会、道徳において、数校の同規模校と共に遠隔授業を推進している。この取組により、子供同士の対話を深め、小グループを想定した「深い学び」に繋げている。本年度からは、中学校も同規模校と道徳の遠隔授業を開始している。子供たち同士の交流が広がり、授業者は各校が輪番で担当することにより、相互の指導力向上にも役立っている。また、小学校においては近隣の同規模校と連携し、相互に訪問しながら内容に応じて一緒に授業を行うなど、「学び合い」を意識した取組も実践している。

㈡　ＡＩ型教材を活用した学習

町教委の推奨もあり、本年度から教科指導の一部にＡＩ型教材「キュビナ」を導入しながら、研究を推進することにした。通常の授業においても一人一人の実態に応じた指導は可能であるが、子供自身が学習進度や理解度に応じて課題追究できる点が有効であると考えている。試行段階であるが、「個別最適な学び」の観点からも有効的な活用について、今後も研究を深めたい。

㈢　校内外の連携による学習支援

「総合的な学習の時間」の教育課程は、学習内容に応じて九年間を見通した編成を行い、担当を小・中職員で割り振り、相互に支援し合う等、校種間を越えた連携を図っている。特に「郷土学習」の領域である「われんきゃガイド」は、手々区の自然や史跡等を調査し、島内外の来校者にガイドとして魅力を発信する取組であり、平成二十八年度から受け継がれている学習である。本年度は町の支援を受け、関連企業と大学研究室の協力を得ながら、人型ロボットのペッパーをガイドの一員として迎えることをコンセプトとして、プログラミング学習とも関連させた取組を行っている。全国規模の大会にエントリーする予定であり、児童生徒の学習意欲が大いに喚起されている。

三　おわりに

極小規模校では、実態に応じたきめ細やかな指導が可能であるが、子供たち自身が他者と比較しながら、自己のよりよい答えを導き出す場面が困難な現実もある。本校の児童生徒が「自ら学びに向かう力」が培われるように、そして、将来必要とされる資質が義務教育段階で十分に育まれるように、今後も指導・支援を一層充実していきたいと考えている。

わが校の

学校経営

楠隼たるために

楠隼中・高　徳留敏郎

一　はじめに

本校は、鹿児島県立として初の併設型中高一貫教育校として、平成二十七年四月に大隅肝付の地に開校し、今年度創立十年目を迎えることができた。校訓「大志・叡智・至誠」のもと、中高六年間の全人教育を通じて、変化が激しく、先行きが不透明なこれからの新しい時代をたくましく切り開いていく次世代型リーダーの育成を目標に掲げ、日々の教育活動を行っている。

また、全寮制男子校として全国から生徒を募集しており、その割合はおおよそ県内生が六割、県外生が四割となっている。言葉も、そして育ってきた文化や環境も異なる生徒たちが交流し、日々切磋琢磨しながら、学校生活及び寮生活を送っている。

二　本校の特色

㈠　寮教育

本校の最大の特徴は全寮制にある。したがって、生徒一人一人の生活の根幹を成すものとして、学校ではこれまで寮教育に最も重点を置き、生徒の支援・指導に当たってきた。

寮では六棟あるうちの一～五棟で中一から高二までの異年齢の生徒たちが同じフロアで生活し、主に高校生が後輩たちの生活面や学習面について、相談に乗ったりアドバイスしたりする、楠隼版「郷中教育」を行っている。

一方、心身ともに成長段階にある中高生が二十四時間一つ屋根の下で生活していることから、生徒同士のトラブルは頻繁に発生する。また、思春期特有の様々な悩みを抱えた生徒もおり、その対応に職員が苦慮することもある。そうとは言え、大半の生徒たちは自律し、他者と協調しながら充実した寮生活を送っており、同じ釜の飯を食った仲間としての団結心はとても強い。

㈡　特色ある教育活動

「シリーズ宇宙学」、「農業漁業民泊体験」、「トップリーダー教室～生き方を学ぶ講演会」、「海外大学企業連携研修」など開校当初から関係機関や地域の協力のおかげで、楠隼ならではの特色ある教育活動が実践できている。

特に「シリーズ宇宙学」においては、JAXAを始めとした宇宙関連産業や大学教員等、専門家の協力を得て講義及び探究活動を行っており、卒業生の中には宇宙関連の大学・学部へ進学した者や、大学卒業後に宇宙航空関連企業へ就職した者もいる。

今後「宇宙に一番近い」肝付町にある学校として、講義や取組の内容を更に精選し、全国各地の子どもたちから「楠隼で宇宙について学びたい。」と希望してもらえるような実践を発信していきたい。

三　おわりに

本校は、令和八年度の中学校の新入生から段階的に女子生徒及び通学生の受入れを始める。特徴の一つである全寮制は形を変えていくことになるが、これまで本校になかった価値観や考えの異なる生徒たちと現在の楠隼生が融合することで、新たな楠隼の姿が生まれることは楽しみでもある。

一方、これから先も変わらぬ楠隼最大のメリットは、六年間の生徒個々の成長・発達を見通した連続性のある学びにある。中高一貫という縦の系統性を意識した指導と、教科横断的な指導を融合させた縦横のつながりを活かした教育活動を実践した結果として、生徒一人一人の希望する進路の実現につなげることが、楠隼が「楠隼たるために」必要なことだと考える。

今後も全国でも類を見ないユニークな学校「楠隼」として、日々工夫を加えた教育活動を実践していきたい。

「学校と地域がつながる～Close to You～」
”ふるさと金峰を愛す“ 子どもの育成

金峰学園（南）　内村健二

一　はじめに

本学園は、南さつま市の北部、東に金峰山、西に野間岳を望む田園風景の中、旧金峰中跡地に位置する。霊峰金峰山を望み、吹上浜も近く、山・海に囲まれた、風光明媚な地域である。豊かな自然に恵まれ、農業が盛んで、超早場米「金峰コシヒカリ」は全国的に有名である。また、地域に伝統行事（田植え踊等）も多く、子どもたちは、重要な文化継承者となって活躍している。校区は、旧金峰町の旧田布施小校区と旧阿多小校区、地区は、田布施に四地区、阿多に三地区、大田、白川、大坂地区を合わせて十地区から成っている。令和五年三月に阿多小、田布施小、金峰中が閉校、三校が統合され、令和五年四月に義務教育学校「南さつま市立金峰学園」が開校した。

二　取組の実際

教育目標「ふるさと金峰を愛し、自ら学び、心豊かでたくましい未来を切り拓く子どもの育成」を掲げ、義務教育九年間を三つのブロックに分け、前期・中期・後期ブロック（四・三・二制）による創造性豊かで連続した学びの実現を目指している。

Ⅰ　特色ある教育課程編成

〈グローカルな人材育成〉

○　特例教科：「金峰学～命と人のつながりをふるさとに学び、世界に伝える探求学習～」の推進

○　国際理解教育の充実

○　学校運営協議会（ＣＳ）との連携

○　関係機関との連携

Ⅱ　系統性、連続性ある指導の工夫

〈義務教育学校九年間を通した系統的な教育課程の編成〉

○　学びの連続性、系統性を踏まえた学習指導

○　乗り入れ授業の導入

Ⅲ　特色ある職員研修・各種部会

〈各種委員会を機能化させ、高い組織力と問題解決力をもったチーム学校の構築〉

○　多種多様な目的に対応した各種委員会の機能化

Ⅳ　学びのスキルの向上

〈児童生徒が自己調整能力を高め、自己学習を進めていく力の育成〉

○　学び方（学びの主体化）指導

○　課題選択型の授業実践

Ⅴ　分かる授業の構築

「個別最適な学びと協働的な学びの往還モデル」による学習者主体の授業実践

○　主体的・対話的で深い学びの具現化

○　非認知能力の育成（体験学習の充実）

三　おわりに

義務教育学校としてスタートして二年目、小中の教職員組織を一体化し、それぞれのよき文化を融合させ、協働的に教育に当たるとともに、前期課程での教科担任制を実施すること、コミュニティ・スクールを核とした地域との連携を強化していくこと、義務教育学校の教育課程の特例を活用して、独自の小中一貫教科「金峰学」を通して、ふるさと金峰を探究する学びを充実させるとともに、国際感覚とコミュニケーション力の向上を目指し、一年生から英語学習に取り組むこと、一年生から九年生までの幅広い縦割りの活動を充実させ、思いやりや憧れ、相互理解の精神など、子どもたちに愛情に満ちた豊かな感性を育む教育活動を推進していきたいと考えている。

一人ひとりが輝く 財部小の特色のある教育活動

財部小（隅）　井手英男

一　はじめに

この執筆作業は三回目であり、校長も三校目となったことに思いを巡らせている。人は常に成長する生き物であり、私も校長として、今まで以上のパワーアップを目指している。

本校は県の最東端曽於市の北部に位置し、宮崎県都城市と境をなし、周囲を田畑・山林に囲まれている、旧財部町の中心地である。明治三年に開設された明倫館が本校の起源とされ、本年度で百五十四年目を迎える歴史と伝統ある学校である。児童数は二百九十名の中規模校で、十二学級、特別支援学級三学級の計十五学級である。

学校教育目標は、「自らを律し、主体的に学び続ける子どもを育てる」である。「強く」、「正しく」、「明るく」の校訓の下、家庭や地域と連携しながら、特色ある教育活動の充実に向けて取り組んでいる。

二　取組の実際

本校では理科や生活科、総合的な学習の時間等で地域の文化や自然を学び、ふるさとに誇りを持つ教育を推進している。また、旧財部町内の学校や各種団体との交流学習を通して、多様な集団の中で自己を見つめ直し、温かな人間関係を築き、自主性や社会性を育む実践に努めている。

㈠　学校応援団を活用した指導の実態

教科教育に関しては教諭が主導で教育実践を行っている。その中で、家庭科や書き方など個別指導が基本となる学習は、ICTや映像教材を通して、個に応じたきめ細かな指導の実践に当たっている。しかし、ミシン指導においては、ミシンの機械のトラブルや個々の裁縫指導に対応を要するため、地域のボランティア団体の協力を得て、指導支援をいただいている。指導を依頼する回数も多いが、毎回四～六名の方々が参加してくださっている。子どもたちも、困ったときには近くの支援者に声を掛け、いつでも優しく教えてもらえる裁縫学習が大好きである。支援者の方も子どもたちとの触れ合いに生きがいを感じているようである。この団体の取りまとめ役の方は、私が財部町教委時代に一緒に仕事をした方から女性連の役員の方までおり気軽に話ができる点も利点である。

㈡　学校における文化財伝承活動

校区には、百を超える集落があり、数多くの伝統芸能が伝承されてきた。しかし、過疎化による伝承者の減少と少子化の影響により、伝承は年々難しくなってきている。そこで、三十年前に小学校と川内集落の俵踊り保存会が連携して、継承活動に取り組み始めた。この当時は、六年生のみで取り組んだ。この伝承一年目の年に、私は初任四年目で六年担任であった。初めての伝承活動として、保存会と数多くの連携と練習に取り組み、運動会で披露できた時の喜びを今でも覚えている。転勤した数年後、財部町教委の派遣社会教育主事として財部町に戻り、俵踊りが継続されていることをうかがい懐かしく感じたことも覚えている。さらに、二十年が過ぎ、校長として、私の振出校である財部小に帰ってきて立場は変わったが、俵踊りと触れ合うことができた。保存会には、教え子の保護者が所属しており、懐かしい当時のこと、伝承活動を三十年間見守ってきた保存会も高齢化問題が浮き彫りとなっていることが話題となった。本年度は、市教委と一般財団法人まちづくり曽於により、練習から発表まで撮影し、映像教材として残すこととなった。このような時代の中で地域コミュニティの一役となる学校が地域に協力できることの大事さも考慮し、数年前から伝承学年を複数学年の五・六年とした。今では、俵踊りの練習を六年生が五年生に教える師弟同行活動となっている。この俵踊りをこれからも続け、五十年を迎えることを目標としたいと考える。

三　おわりに

本校の教育課題は学力向上であるが，本校では学力向上と両輪をなす生徒指導の充実に、地域の見守り活動が必須の現状がある。子ども一人ひとりにそれぞれ異なる課題はあるが、地域には、「子どもは地域の宝」を合い言葉に子どもたちの健全育成を見守っていただいている。我々教職員もどういった努力をなすべきか、真剣に考えていかなくてはならない時代にある。「教育が人をつくる」という言葉があるが、学校長として何をなすべきかを考えつつ、これからも実践的な研究を進めていきたい。

県教委に拾ってもらったダメ教員だった自分が、県教委への恩返しのつもりで、最後の教職に勤めている。自分に何ができるのか、鹿児島・曽於の子どもたちのために何ができるのかをしっかりと考え、今後もがんばりたい。

心に残るひとこと

人生を楽しむために

生見小(市) 井　上　智　司

「僕は、退職しても人生を楽しむためには、文化と運動が大切だと思っていた。」

先日参加した初任校の同窓会での会話です。同席した当時の校長先生がおっしゃいました。あれから三十六年。柔和な表情としゃんとした背筋、スリムな体形は、その当時のままでした。九十歳が近いにもかかわらず、とても健康的だったので、その秘訣を尋ねたところ、こう答えられました。「文化は書道、運動はバドミントン。」でした。

初任当時、水曜日の放課後に、校長室で習字教室が開かれ、新規採用職員は全員参加していました。時には作品展に参加し、裏打ちをする機会があり、いっぱしの書道家になった気になることもありました。

「私は、校長先生のおかげで習字に触れることができ、とてもありがたかったです。」

一緒に練習していた同僚が感謝の言葉を述べました。私も同感でした。様々な場面で筆を持つ機会がありましたが、臆せず書くことができました。そのたびに、感謝の気持ちを改めて感じることでした。その校長先生は、現在も書道教室を三か所で開いていらっしゃいます。

また、バドミントンは週三回、近隣の夜間開放校で汗を流しているとのことでした。

「井上さんも参加してみない。」

その誘いに乗り、同席した初任校の先輩と一緒に参加することにしました。まずは週一回から始めています。

初めての日は、ラケットの持ち方やサーブ・ラリー・スマッシュの打ち方等一通り教えてもらいました。その後は、ダブルスのゲーム形式で、夜七時から約二時間の練習でした。上手な方はあまり動かずに前後左右に打ち返されるので、素人の私はレシーブのために走り回るばかりでした。続けるうちに、周りの方々からも、「上手になってきたね。」と、言われるようになりました。

退職前によい話が聞け、体験できたのはとてもありがたいことでした。そこで知り合えた方々とのつながりも生かして、自分なりの健康的で文化的な生活を楽しんでいきます。

心に残るふたこと

伊作小(日) 福　元　賀　博

これまでの人生を振り返ってみると、たくさんの方に出逢い、様々な面で助けていただいたり、御指導やアドバイスをいただいたりした。今の自分があるのは、これまで、出逢い、お世話になった方々のお陰、まさに「出逢いに感謝」、この言葉に尽きる。中でも、人生の教訓としている言葉が二つある。

心に残るひとこと　①「生魂を入れんや！」

※鹿児島弁で「いっだましゅ、いれんや」

私が少年時代に父からよく掛けられた言葉である。家で勉強をしている時や農作業の手伝いをしている時、その他の時分、物事に対して気の抜けた様子ややる気のない様子で取り組んでいる私を見るたびに、ドスの効いた大きな声で、「〇〇！いっだましゅ、いれんや！」と、一喝されていた。当時の私は、この言葉を「しっかり、しなさい。」という意味であろうくらいにしか認識していなかったが、この職に就き、（いっだましい＝生魂）と認識するようになった。「物事に取り組むときは、魂を込め、そのことに集中し、全力をあげて取り組みなさい。」そういうことを父は伝えたかったのだと、勝手に解釈している。

心に残るひとこと　②「ピンチがチャンス！」

今から約二十数年前、当時の上司からいただいた言葉である。当時、これまでの職種と全く違う環境で仕事をすることになった。最初は、これまでの職場と全く勝手が違い、不安な毎日が続いた。しかし、職場の上司、先輩方、同僚の方々に、一つ一つ丁寧かつ親切に教えていただきながら、何とか仕事を進めていったことを記憶している。二年目、仕事に少しずつ慣れ始めた頃、地区内で十二年ぶりに開催される大きなイベントの担当となった。企画・立案・準備・連絡調整等々、頭を悩まされることが多く、次第に行き詰まっていった。そんな自分の姿を見かねた当時の上司が、「『ピンチがチャンス！』今あなたは、この仕事のことで大変悩んでいるし、困っている。しかし、この機は、あなたが今より成長できる大きなチャンスなんだよ。そう思って、頑張って乗り切りなさい。」と、声を掛けてくださった。その後、上司をはじめ同僚、関係者の方々の助けもあり、イベントは盛会のうちに終了し、なんとか乗り切ることができた。安堵しながら、また、周りの方々に感謝しながら振り返ったことを記憶している。

弱音を吐きそうな時、自分は油断をしているのではと思った時、またはピンチの時、これらの言葉を思い出し、これまで、なんとか乗り切ってきた。今後の人生もこれらの言葉を大切にしつつ、しっかりと胸に刻み、物事に取り組んでいきたい。

「いっぱい話し掛けるんだよ。ちゃんと伝わっているから。」

中沖小（隅）有留盛昭

病院の待合室などで近頃よく見かける風景。抱っこ紐の中から母親の顔に手を伸ばす赤ちゃん。触られながらも、手にしたスマホをずっと見ている母親。どの家庭にもそれぞれの子育てがある。この母親の横顔を眺めて育った赤ちゃんは、どのように育っていくのだろう。

今から十年前、我が家に長男が誕生した。当時の校長先生が長男を正面から優しく抱きかかえて、たくさん話し掛けてくださった。そして、教頭だった私と妻に「いっぱい話し掛けるんだよ。赤ちゃんはしゃべらないけど、ちゃんと伝わっているから。そして、覚えているから。」と声を掛けてくださった。赤ん坊の顔をニッコリと笑顔で見つめながら、「あー」、「うー」の声に返事をするように、ずっと話し掛ける校長先生の姿は今でも忘れられない。

教職に就いたばかりの頃、たいした指導技術もなく、得意な教科等も持っていなかった私だが、先輩方のまねをしながら、昼休みには子供たちとたっぷり遊んだ。トラブルも子供たちと共に話し合って解決した。私の思いは、きちんと伝わっていたように思っている。

今、働き方改革や業務改善が叫ばれるが、それでも若い先生方には「できるだけ昼休みは子供たちと遊んでください。」、「子供たちと一緒に活動してください。」と指導している。活動や楽しい場を共有しながら、たくさん会話をしてほしいからだ。相手が子供であっても、相互理解が大切だ。遊びや活動を通してこそ、信頼関係は築けると思う。子供の表情・感情を受け止めて、大人の気持ちをいっぱい話し掛けてほしい。伝えたいことは、ちゃんと伝わると思う。

私の世代が教員になった頃と今では、子供たちの生活や家庭教育力、地域の教育力などが、大きく変わってきている。しかし、子供たちの本質が変わったわけではないはずだ。できることならスマホの光で青白く照らされた横顔を見せるのではなく、子供の心の声を聞こうとしている私たちの姿を見せたいと強く思う。

負けないこと・働くこと・団結すること

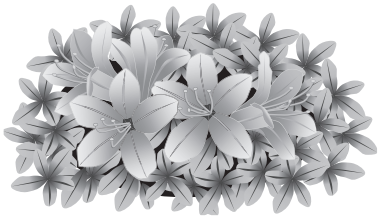
龍郷小(大) 住　友　智　光

この言葉は、私の人生の礎であり、私の教職生活の糧となっている言葉である。先輩方からいただいた心に響く道標となる言葉の数々。その土台にはこの言葉がある。

私は喜界島の上嘉鉄集落で育った。約十三年前に閉校した母校の校区スピリッツが「負けないこと・働くこと・団結すること」であった。『負けないこと』は、「自分自身の弱い心に負けるな」という教えである。どんな困難にあっても諦めずに忍耐強く最善を尽くすことが大切である。『働くこと』は、よりよい生活を目指してよく働くこと。加えて、私と弟を幼少の頃から父親代わりとなって育ててくれた祖父は、「ただ与えられたことをこなすだけではだめだ。どおちん（知恵・創意工夫を意味する方言）を働かせて、効率的かつ効果的に仕事をせんといかん。」と、自らの後ろ姿を見せながら教えてくれた。『団結すること』は、同じ目標に向けて、一致団結して取り組むことである。

小・中学生時代、学校の先生や校区体育協会の先輩方が、このスピリッツの下、若者にやる気を起こさせ、鍛え、結果を出させ、自信をもたせてくださった。井の中の蛙であったやっせんぼの私が、大海といえる社会に出て困難な壁を幾度も乗り越えられたのは、故郷で培ったこのスピリッツのおかげである。私は、このスピリッツは、時代を超えて変わらない価値ある教えであると思っている。まさに今の鹿児島県の教育基本目標「夢や希望を実現し　ともに未来を創る鹿児島の人づくり」や、教育施策の五つの方向性そのものだと思う。

校長になった今私が思うことは、根底にあるこのスピリッツを基盤に、ますます自己研鑽に励み、職員指導の質を高めることである。どうちんを働かせ、多くの方々からの教えを後輩たちに繋げ、「チーム学校」で教育の質を向上させていくことで、私が受けてきたたくさんの恩を少しずつ返していきたいと思う。



ある日の校長講話

母校愛

永田小(熊) 木　下　栄　人

皆さん、母校という言葉を知っていますか。小学校、中学校、高校とその人が学んで卒業した学校のことです。多くの友達と出会い、たくさんの思い出をつくった母校は、一人一人にとってかけがえのない場所であると、私は思います。

さて、今から、ここ永田小学校を卒業された岩川さんの詩を紹介します。還暦記念(六十歳)でこの詩を書かれ、三十年以上、校長室に掲示してあります。今からこの詩を二回読みます。岩川さんがこの詩を通して伝えたかったのは何か、考えながら聞いてください。

せんだんの木

せんだんの木　君と再会できて　僕はうれしい
君の昔と変わらぬ姿に　僕は感激した
君は黙して語らないが　誰よりも知っている
多くの子供たちを　温かく見守ってきた
でも　子供たちが少なくなって　淋しいだろう
この子供たちに　夢と希望を与えてほしい
僕のためにも
平成二年十一月三日　還暦記念　岩川　重覚

どうでしたか。私は、母校のシンボルツリーであるせんだんの木に対する愛情、子供たちを見守ってくれという後輩への愛情などを感じました。岩川さんの母校への思い、母校愛がよく伝わる詩ですね。今もお盆やお正月には、卒業された方々がよく学校に立ち寄られ、変わらぬ学校の様子を観て、小学校の日々を懐かしんでおられます。

創立百四十八年目を迎えた永田小には、岩川さんのように母校を大切にしている先輩方がたくさんいます。そして、やがて皆さんもその一人になります。いつまでも皆さんが誇れる永田小であり続けられるよう、校訓や伝統を引き継いでいきたいものです。そして、皆さんの頑張りを多くの方々にブログ等で紹介していきたいと思います。

今朝の話は、母校愛についてでした。

ブーメランの法則
～校内人権週間を迎えて～

八幡小（市）内　田　奈緒美

今日から十一月です。二学期も半分終わりました。あっという間ですね。ようやく「秋」という感じになってきました。朝夕がだいぶ涼しくなってきて、風邪を引きやすくなります。手洗いや服装の調整など、風邪の予防に必要なことを、自分で考えて過ごしましょう。

今日のお話はこれです。（スライドで「ブーメランの法則」を提示）みなさんは、「ブーメラン」を知っていますか。そうですね、投げたら戻ってくる道具ですね。（スライドにブーメランのイラストを提示）昔、オーストラリアなどで狩りをする時などに使っていた、木を使って作った道具です。「法則」というのは、「きまり」のようなものです。

今日は、校長先生も工作用紙でブーメランを作ってきました。ちょっと見ていてね。（ブーメランを投げる）ほら、ちゃんと返ってきましたね。「ブーメランの法則」というのは、このブーメランのように、自分がしたり言ったりしたことは、必ず自分に返ってくる、というものです。

例えば、周りの人に優しい言葉を掛ければ、自分にも優しい言葉が返ってきます。反対に、嫌なことを言ったら、それが自分にも返ってきます。校長先生も、本当にそうだなあと思うことが子供の時も大人になってからも、何度もありました。

友達に助けてもらった時、「ありがとう。」と言えば、別の時に、その友達から「ありがとう。」という言葉が返ってきました。校長先生は友達と喧嘩をしたことはあまりないけれど、友達同士の喧嘩を見ていたら、一人が汚い言葉を投げ掛けると、相手も汚い言葉で返していました。

みなさんは、まわりの人にどんな言葉を掛けたり、どんなことをしたりすることが大事だと思いますか。

今週は、校内人権週間です。それぞれの学級でいろいろなお勉強や取組をすると思います。その時に、「ブーメランの法則」のことも思い出してくれたら嬉しいです。

油断大敵

鶴川内中（北）井久保　康　彦

昔の呼び方で六月のことを水無月といいます。その雅（みやび）な呼び方とは逆に、六月は生命の源となる水のあふれる月でもあり、ややもすると生命を奪う水に豹変することもあります。通学路や自分の身の回りで、水によって引き起こされる事故の可能性を想定しながら、より安全な生活を送りましょう。

ところで、時の流れは早いもので一学期も残り少なくなりました。この時期は油断や気の緩みから、事故にあったり、思わぬトラブルに巻き込まれてしまったりする危険性が高くなる時期とも言われます。慢心することなく常に注意深く行動することが大切ですね。

さて、平安時代に活躍した「吉田兼好」が書いた『徒然草』の「高名の木のぼり」の段にこんな話があります。

木に登っている男が、高い所で枝を切っている時には、何も注意しなかったのに、仕事を無事に終えて、もう、家の軒の高さくらいまで下りてくると、「危ないぞ、気をつけろ。」と名人は声を掛けたのである。兼好は、名人に尋ねた。「これくらいになれば、飛び降りることだってできる。なぜ今になって注意するのですか。」名人は答えた。

「ここが大切なのです。目が回るほど高いところで今にも折れそうな枝につかまって作業しているときは、本人が十分に注意していますから、あえて注意しろという必要はありません。過ちというのは、易しい所に来て、もう大丈夫と、心に油断ができたときに、必ず起こるものなのです。」今まさにみなさんは、一学期の終わりに差しかかり、木登りで言えば軒先の高さにまで降りてきた状態なのかもしれません。油断することなくしっかりと、自分の足元を見つめながら、自分の進路を目指して一学期を締めくくりましょう。

話のひろば

不易と流行の絶妙なバランス感覚

切通小(北)
塩屋　みゆき

私自身が新採の頃、勤務先の校長先生に何かを教えた（教えてあげた）という記憶は一切ないように思う。また、新採の私に教えてほしいと当時の校長先生から相談を受けた記憶もない。御指導をいただくだけで、自分の知識を伝授する機会もなかった。今思えばそれが当たり前の時代だったのかもしれない。

あれから数十年の時が流れ、世の中もだいぶ様変わりしてきた。新しい便利な道具があふれ学校現場にも一人一台端末のタブレットが導入された。ＩＣＴ機器に堪能な教頭先生、校長先生方は別として、私はスマホが少し触れる程度の腕前（腕前と言うのだろうか）「県域ドメイン」、「アカウント」、「クラウド」のワードが出てきたあたりからその腕前も黄色信号点滅。これは困った。説明をスマホで検索してみる。書かれている内容が既に意味不明。そんなとき、ちらりと視界に入るのが新採の教職員。作業が少しも進まず困り果てていると「どうしました？これは、ここをクリックして、ここから選んで・・・」と実に懇切丁寧に教えてくれる。職員室の風景が数十年前とは全く違う。校務分掌の情報担当者欄に新採職員の名前が挙がり、職員連絡会では、その担当者がしっかり、はっきり、易しい単語を使って堂々と説明する。頼もしい。「自分以外は師」と改めて思う昨今である。

「分からないことはそのままにせず、どんどん聞いてみよう。やってみよう。」教諭時代はあれほど当たり前のように子供たちに語っていたではないか。

先行き不透明で、予測困難な状態をＶＵＣＡ（ブーカ）変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字からいうとのこと。たくましくしなやかに生き抜くためには、これまで長い間大切にしてきた不易なるものと、時代の流れで生み出された最新科学や、価値観の相違を互いに認め合い、よりよいものを選択、追求していく自己内の絶妙なバランス感覚が必要だと思う。

タブレット学習では、子供たちに操作を教えてもらい、今日も「校長先生、上手だよ。」と褒められている。

主体性から楽しさへ

西浦小（姶伊）
大給　善仁

「先生、かけ算を暗記したので聞いてください。」、「今度のテストで百点をとったら教えに来るからね。」子どもたちが目を輝かせて校長室へやってくる。その笑顔やまなざしから、一人一人の喜びと成長を感じ取れる。また、それらを一緒に共有できることは教職の魅力と思う。

全校児童四十人の小規模特認校である本校では、子どもたちに自己肯定感や自己有用感を向上させるために、主体性やモチベーションにつながる活動を重視している。

児童会で取り組んでいることは、校内に「心がきれいになる宝箱」と名付けたゴミ箱を設置してのゴミ拾い活動。「あいさつで楽しさいっぱいみんなが笑顔の西浦っ子」のスローガンを掲げての朝のあいさつ運動。廊下に「ありがとうの木」を掲示して、子どもたち同士で感謝のメッセージを投稿し合っている。

子どもたちに活動後の感想を聞いてみると、ほとんどの子から「楽しい」の一言が返ってくる。その後には「自分たちで決めたから。」、「やりがいや達成感があるから。」、「友だちと協力し合えるから。」などの理由がついてくる。

主体性を持つことで、自分の目標に向かって積極的に行動できるようになる。これにより、達成感や自己成長を感じることができ、結果として楽しさも増す。夢中になって、楽しく取り組んでいる子どもたちの姿を見ていると、教師の支援は必要ないと感じる時もある。

情報が氾濫し、周りの環境が急速に変化する現代において、自発的なアイデアや自己選択・自己決定の場を段階的に与えることは、「今が楽しい。」、「まわりの人たちへ感謝したい。」、「将来の夢を実現したい。」などのウェルビーイングを向上させる重要な要素である。

これからも小規模校のよさを生かしながら、全職員が子どもたち一人一人にチームで対応し、温かい雰囲気の中で、学習や集団生活が送れるよう支えていきたい。そして、子どもたちや職員の笑顔が少しでも多く見られることを願っている。

奄美のサツマイモ

笠利中（大）
久津輪　修一

「これ、捨てないといけない？」妻の手にはサツマイモが一個。長らく袋に入れたままで発芽し、種芋状態だった。「もったいない。」八月初旬、培養土の袋に水抜きの穴を数箇所開け、その種芋を土の中に入れ住宅の軒下に置いた。通常のサツマイモ栽培は二月から種芋の準備を始め、五月から七月初旬までに芋ヅルを植え付け、梅雨や真夏の暑さの中で成長させ、九月から十月には収穫する。「芋ヅルができるのに一か月はかかる。九月に植え付けるのは遅すぎるかな？」しかし、奄美博物館で見た歴史・生活文化の展示物に「奄美では年間を通してサツマイモ栽培を行っていた。」という記述があったことを思い出した。「そうか、奄美では十℃を下回ることは非常に少ない。霜も降りない。一年中栽培できる？」こうして、偶然にも、サツマイモの通年栽培実験が始まった。

九月初旬には、一個の種芋から十五本の芋ヅルを取ることができ、住宅の敷地内に畝を作り植え付けた。そして、厳しい残暑の中で成長し、年末には小ぶりだが、たくさんの芋を収穫することができた。三週間ほど熟成させ焼き芋にすると、驚くほど甘く美味しかった。

サツマイモはすごい。無駄になるところが無い。芋だけでなく、収穫の時に刈り取るツルや

葉も食べることができる。ツルはきんぴらで美味しい。茹でた葉の食感は、とろみがありモロヘイヤのようだ。奄美のお年寄りの話では、葉のぬめりをシャンプーとして洗髪に使っていたらしい。さらに、残った芋ヅルは、植え付ければ再度活着し、栽培を続けることができる。一月初旬から栽培実験は引き続き続行とし、五月中旬が次の収穫となった。またしても、芋もツルも葉も食材。残ったツルを植え付けると栽培はさらに続行。半永久的に。通常の栽培期間は四か月だが、「冬場はさすがに気温が上がらないので五・六か月かかる。でも、上手くやれば年間三回は収穫できる。」という見通しを持った。必要な分だけを収穫し栽培期間を少しずつずらすことで、一年中食糧にすることも可能だ。

「薩摩を飢餓から救った。」と言われているサツマイモ。その強い生命力を体感し、奄美特有の農耕文化の一端に触れることができた。以前、「雑草魂」という言葉を耳にしたが、私には「サツマイモ魂」だ。

読書案内

■ 樺沢紫苑　著

精神科医が見つけた　3つの幸福
最新科学から最高の人生をつくる方法

知名小(大)　長　井　忠　寅

こんなにも不幸な出来事が続くなんて、神様はいるのだろうか。約二十年前、そんな境遇の子供を担任していた。一年間に、両親、祖父母の四人と死別するという、途方もない悲しみを抱えていた。ただ本人は、そんな苦しい中であっても、明るく生きようと、毎日必死で笑顔をつくりながら学校生活を送っていた。私は担任教師として何かできることはないのか、どんな言葉を掛けてあげればよいのか、日々思い悩んでいた。思いつくどんな言葉も、心を癒すという目的のもとでは、力不足だった。無力感にさいなまれた中で私が辿り着いた答えは、「その子供の幸福を願い続ける」ということであった。幸福を願うことは、現在も続いているのだが、最近になり、「幸福とは何か」という問いが生まれ、ある日、本書と出会った。この本の著者は、精神科医である。ゆえに、脳科学の構造的な知識をもとに、幸福を追及している。

この本の中で深く心に残った文章がある。それは、「ありがとうは、言えば言うほど自分が幸せになる言葉。そして、ありがとうは、言えば言うほど相手を幸せにする言葉なのです。」という文章である。以前勤めていた職場で、「『すみません。』は要らないから、その言葉を『ありがとう。』に変えてもらえませんか。」と、指摘されたことがある。新しい職場で分からないことが多く、知らず知らずのうちに使っていたのであろう。自分自身全く気付いていなかった。その後、意識的にありがとうを使うようになり、お互い笑顔が増え、友好な人間関係が構築できた。ありがとうという言葉の力に感謝をした。私の中には、「ありがとう＝幸福の種」という図式が完成した。先ほど述べた教え子が、現在どんな生き方をしているか定かではない。同窓会でも会うことができなかった。ただ、次会える機会があれば、「君の幸せをずっと願っていたよ。君と過ごした一年間は楽しかった。ありがとう。」という言葉を贈りたいと、考えている。

株式会社飛鳥新社　千五百円

■ 佐高　信　著

原田正純の道
水俣病と闘い続けた医師の生涯

盈進小（北）横　峯　　健

「この世に二種類の人間がいる。富める者と貧しき者、加害者と被害者、健康者と病者、都市と農村、先進国と途上国、多数民族と少数民族など、この世には対立の構図がある。その差別をどうなくすかが人類永遠のテーマである。そして、自らをどっちの側におくかということが『この道』を決める。どの道を進むか選択の自由であるが、私は命ある限り今まで歩いてきた『この道』を行こうと思う。多くの人に支えられながら。」

これは、医師の立場から胎児性水俣病を見い出し、常に患者の側に立った水俣病研究の第一人者、本町出身の原田正純さんの言葉である。

熊本県の南に位置する水俣市で、「水俣病」が発生した。水俣病は、手足がしびれる、目に見える範囲が狭くなる、言葉がはっきりしないなど、いろいろな障害を引き起こす病気である。最初は原因が分からず奇病とされていたが、原田さんは、水俣病の実態解明に向け、自ら現地に赴き患者たちの診察を続けた。どんなに少数派に追いやられても、自分の主張を曲げずに進んでいくことは、苦難の連続であったであろう。それでも決してめげることなく、常に笑顔で患者に寄り添い、患者のために闘い続けてきた足跡が描かれている一冊である。

先日、胎児性水俣病患者の方を講師に招き、講演と交流を行った。講師の方も、原田さんの母校（母校の平川小は盈進小と合併）で講話することに深い縁を感じ、感慨深げであった。講話後には自然と児童が集まり、和やかに交流を深めていた。児童から、「つらいことがあっても、人生を楽しむことをあきらめない姿はかっこいい。」と、感想が出るなど大変有意義な学びとなった。患者の生の声は児童の心に響いていた。郷土の偉人の功績や生き方をもとに、児童が安心・安全な生活や、これからの生き方について考える機会を継続させていくことが、私の役目だ。

毎日新聞社　千八百円

■ 福永秀敏　著

病む人に学ぶ

桜山中（南）益　山　孝　一

二十数年前、病弱教育に携わる機会を得た。義姉が脳性まひ患者ということもあって、自分自身も興味があり、希望した養護学校（現：特別支援学校）に赴任することができた。

最初に担任した生徒は「筋ジストロフィー」という進行性の病気があり、生活の多くの場面で支援者にサポートしてもらいながら、学校や病院での日常を過ごしていた。教師という立場で授業中に行動支援したり、トイレ等の生活介助を行ったりしていくうちに、こういう時はこんなものがあると役立つのではないか、こんな道具があると便利に生活できるのではないかという発想になり、技術科教員ということもあって、授業で使う支援治具のみならず、日常生活で活用できるような補助具なども手作りで製作したことを懐かしく思い出す。一人一人の実態に応じた個別の支援や指導を当たり前のように毎日の実践の中で学ばせてもらった。

本書は、当時、国立療養所南九州病院（現：独立行政法人国立病院機構南九州病院）の院長であった著者が、長年にわたり難病患者やその家族等の支援者と正面から向き合い、生きることの素晴らしさや人間のすごさを実感しながら、難病医療に携わる一人の医師としての想いを読みやすく、分かりやすく述べたエッセイである。私が養護学校在任中、思春期に生命を閉じた生徒たちもいた。耐え難い辛く悲しい想いを本書で癒してもらい、勇気付けてもらった記憶もある。

また、本書の特徴は、著者の病院経営者としての側面が垣間見えること。医療制度や障害者自立支援法などの、難病医療・福祉を巡る制度改革、そして、医療安全に関する取組が求められる中で、経営者として、いかに意思決定し、取り組んできたのかがよく分かる。校長になり、本書を読み返してみたら、学校経営する立場で、どのように考え、判断すべきかの参考にもなる。

著者の院長心得である「くめひろし」（くさらず、めげず、ひるまず、ろうをいとわず、しなやかに）は、今後の自分の学校経営心得として参酌したい。

日総研出版　千八百円

趣味・文芸

人生後半戦の趣味探し

桜丘中（市）松　永　英　一

私には三人の娘がいる。ある日、その娘たちから「定年退職後は大丈夫なの。趣味が全然ないじゃん。」と、言われた。たしかに趣味がない。休日は家でごろごろしている。録りためたドラマをテレビで見ている。我が父は老後を豊かに過ごせるのだろうかと心配する娘心が発した言葉だろう。

娘たちの心配とは裏腹に、これまで趣味がなくて困ったことはない。家庭では、子供たちの成長に一喜一憂し、学校では、生徒の頑張りに胸が熱くなる。また、教師として「授業が上手くなりたい。」、「学級経営を充実したい。」、「部活動で試合に勝ちたい。」など、職業人としてスキルアップすることを常々考えていた。それで心は十分満たされていた。

しかし、子供たちが巣立ち、生徒と触れ合うことがなくなると考えると、一抹の不安がよぎる。これまでと同じ生活でよいはずがない。

本県教員になってから、赴任した土地で様々なことを経験させていただいた。しかし、その経験は趣味へと昇華しなかった。

初任地の種子島では、船で瀬に渡り、撒き餌によるフカセ釣りを体験した。本命はクロ（メジナ）だったが、下手なのでヒツオ（イスズミ）ばかり釣っていた。陸からも釣りをしたが、本命は釣れず、クサビ（ベラ）ばかりだった。時々、コッパグロ（小さなメジナ）が釣れ、唐揚げにして食べたのがよい思い出となっている。ただ、今は全く釣竿を手にしていない。元来、不器用で釣りの仕掛けを上手に作れないというのが理由である。

二・三校目は鹿児島市の学校に勤務した。この両校で一番夢中になったのは麻雀だった。両校とも同世代の同僚が多く、休日、仕事のことは忘れて、麻雀に興じた。麻雀は四人で楽しむが、五人集まることもあり、その時は上手な人の後ろに回り、牌の切り方を見ているのがとても勉強になった。そのような経験を経て、人並みに打てるようになった。「国士無双」や「大三元」など役満で上がったのは忘れられない思い出である。その後、行政職、管理職となり、麻雀をすることはなくなった。四人集まらないと成立しないので、趣味にするにはハードルが高かった。

行政勤務の際には、昼休み、健康保持のため、ウォーキングを欠かさずしていた。同僚と話をしながら歩くのが楽しかったからに他ならない。今は、一人だと歩く気にならないので続けていない。

結局、これまで赴いた任地で出会った同僚たちと何かに興じることはあったが、一人で何かに熱中し、時を忘れるまで取り組むものは一つもなかった。

趣味とまではいかないが、人並みに行ってきたことは読書である。

教育書に目を通すことはよくある。職によりその内容は変わってきた。いずれも仕事に生かす、仕事に生かせるとの思いから読書をしてきたように思う。朝読書が盛んに行われていた頃は、生徒が読んでいる本を読むようにした。生徒との会話の素材になるからだ。思いの外、夢中になったのは『ハリーポッターシリーズ』であった。シリーズ本が何巻も発刊されたが、最後は新刊が発売されると同時に購入し、読み耽った。現在は、ＰＴＡ新聞等に職員の愛読書が紹介されているので、それを参考に読書をしている。先生方との会話に活用したいからだ。最近、読んだ本は、池井戸潤作の『俺たちの箱根駅伝』上下巻あっという間に読み終わった。

このようにして、読書を楽しむことは趣味になり得るかもしれない。しかし、果たしてそれだけでよいのか。

先日、部屋の片付けをしていると、大学の卒業論文が見付かった。論文名は、『建部綾足の研究』。近世国文学を専攻しており、あまり研究が進んでいない人物にフォーカスして卒業論文に取り組んだ記憶がある。研究内容を掻い摘んで紹介すると、綾足と交流のあった楫取魚彦が編纂した用字辞典『古言悌』を典拠として、綾足は自身の作である『西山物語』を作成したのではないかということである。ここから、照合作業が始まった。『古言悌』に収録されている用字と『西山物語』に記載されている割注の言葉が一致しているかどうかひたすらチェックした。複数の同一語が確認され、『西山物語』は『古言悌』を典拠として、割注に記載しているのではないかという結論を導き出した。

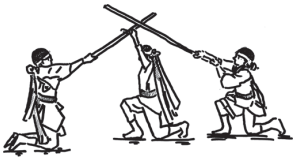
卒業論文のようなものを作成することは、これまで紹介してきた読書とは趣を異とする。平たく言えば、目的をもって読む、調べるために読む読書ということになる。大学四年次のことを振り返り、人生後半戦、そのような読書があってもよいのかなと思っている。自分自身、鹿児島弁が抜けなくて困っているので、鹿児島弁の研究でもしようかと、密かに思っている。故郷の川内辺りの方言を。

趣味がなくとも、これまで何ら支障がなかったが、人生後半戦に向け、趣味探しをしていこう。晴耕雨読という四字熟語のとおり体を動かすことにも目を向けながら。

郷土の紹介

大隅の今につなげる伝統と歴史

大隅中（隅）
馬込　昇



一　はじめに

曽於市は大隅半島の北部に位置し、鹿児島県と宮崎県を結ぶ交通の要所となっており、陸路で大隅半島へ向かう際の重要な中継点となっている。自然豊かな大地で、畜産を中心とする農業の町である。本校は平成十七年に大隅町内四中学校の統合によって岩川中学校を改築して開校した。

二　祭りが繋ぐ人の絆

大隅岩川は、「弥五郎どん」で有名である。毎年十一月三日（文化の日）に、曽於市大隅町で「県下三大祭り」と称される「弥五郎どん祭り」が開催され、市内外から多くの人が訪れる。夜中の一時に「弥五郎どんが起きっどー」のふれ太鼓で目を覚まし、朝六時頃、身支度を整えた「弥五郎どん」が岩川八幡宮の境内で綱に引かれ、巨体がやおら身を起こす。

岩川八幡神社は本校から約二百メートルの距離にあり、校歌にも歌われている「八幡の森」の中にある。祭り当日は、そこから四メートル八十五センチの大男が勇ましい姿で町を練り歩く。先導するのは、子供から大人まで、おそろいの黒装束に法被姿の弥五郎太鼓隊、そして、「弥五郎どん」の縄を引くのは町内の小学五年生である。沿道では溢れんばかりの観光客がそれを見守る。この日は「浜下り」のほか、「武の神様」に由来する各種武道大会も開催され、本校の生徒も多く参加している。また、前日には大隅町文化センターで前夜祭「どんドン祭り」も開催され、町は祭り一色となる。

二か月程前から実行委員会が開催され、市の観光課や商工会、あらゆる関係団体が参加して準備が進められる。人と人が横と縦につながる地域を挙げてのイベントである。人と人とのつながりや協力なくしては決してできない祭りである。本校のPTAや保護者同士のまとまりのよさもここから来ているような気がする。

本校正門前での浜下りの様子

三　過去に学び、未来に繋ぐ命の尊さ

本市では毎年、海軍芙蓉部隊戦没者慰霊祭が開催される。大隅町八合原の一隅に、「芙蓉之塔」と大書した石塔が高く建っている。この付近一帯は太平洋戦争末期、昭和二十年頃、岩川海軍航空基地があった場所である。

この基地を使用したのは、夜間奇襲を専門とする海軍芙蓉部隊である。芙蓉部隊は、昭和二十年三月末、静岡県藤枝基地から沖縄防衛作戦のために鹿屋基地に進出して戦い、さらに同年五月、岩川基地を最後の根拠地として終戦まで戦い続けた。延べ六百余機が出撃し、藤枝基地を合わせて百余名の戦没者を出した。

この苛烈な状況の中で、大隅町の人々は食料も諸物資も窮乏し敵機の空襲に脅かされても、基地の隊員たちを温かく慰問し元気づけた。短い期間であるが隊員と住民の間に結ばれた心の絆は戦後も続き、その結晶として昭和五十三年に、「芙蓉之塔」が竣工・除幕された。

慰霊祭には地域の小中高の代表児童生徒と本校吹奏楽部が参加している。また、関連して「総合的な学習の時間」や夏休み期間中の平和学習の中で生徒たちが学ぶ機会を設定している。

芙　蓉　之　塔

四　おわりに

国道二六九号沿いに道の駅「おおすみ弥五郎伝説の里」がある。特産品販売所の農の土家（どか）市、憩いの広場や飲食店もあり、高さ十五メートルの巨大な弥五郎どんが鎮座する銅像広場からの眺望は、町並みを一望できる格好の場所である。また、植栽された約千五百本の桜が見頃を迎えると、県内外から多くの人で賑わう。ジョギングコースも設置してあり、本校の学校行事「クラス対抗駅伝大会」もここで行われる。大隅の豊かな文化や歴史、そして食を堪能していただきながら、ぜひお立ち寄りいただきたい。

専門部だより

〈総務部〉

一　各地区校長会との連携

各地区校長会との連絡会は、鹿児島市、鹿児島郡、日置、南薩、姶良・伊佐、大隅、熊毛、大島の八地区で開催できた。

連絡会では、九州・全国大会への参加及びその予算、中学校部活動地域移行の進捗状況、教頭職の処遇改善などについて意見交換がなされた。今後は県教委からの情報共有に努め、学校間連携を更に図ることを確認した。

二　教育機関・諸団体との連携

県教育委員会との連絡会（七月三日）では、教育長、副教育長、教育次長、各課長との意見交換を行うことができた。

県ＰＴＡ連合会との連絡会（七月十三日）では、多様化する時代の中、ＰＴＡ活動の在り方やその必要性、様々な取組状況などについて意見交換がなされた。

県教頭会との連絡会（九月四日）では、「教頭の業務改善に関する意見集約」の結果を基に情報交換がなされた。

県退職校長会との連絡会（九月二十七日）では、「魅力ある学校づくり」について協議がなされた。

教職員課との連絡会（十一月十三日）では、管理職の異動と任用、役職定年、後継者育成、教頭の業務改善などについて意見交換がなされた。

三　学校予算に関する要望活動

各地区校長会・県立学校からの要望を集約した要望書を作成し、十月二十九日、県教育委員会に対して学校予算に関する要望を行った。

教職員の配置改善の面では、小・中学校における加配教員の確保や主幹教諭の配置、高等学校における教頭・養護教諭の複数配置や加配の拡充等の要望を行い、また、特別支援学校においては養護教諭・栄養教諭の配置基準の見直し等について要望した。

県教育委員会からは、令和七年度の国の概算要求等を注視しながら、必要な財源確保に努めること、児童生徒の推移等を踏まえながら、必要な教員の採用に努めていくことなどの回答があった。

四　その他の各種会合の開催

日本教育会全国教育大会は、「多様性を尊重する態度を育てる教育」を主題として、オンライン方式を併用して十月十二日に静岡で開催された（参加者四二〇人）。

〈研究部〉

一　鹿児島県小・中学校長研究大会開催

〈大会主題〉

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

本年度の研究大会は、一日開催として軌道に乗せるべく、全体会場を一堂に会して行えるよう川商ホールとし、できるだけ一分科会一会場となるよう周辺のホテルを利用した。開催期日も土曜授業のある第二週を避け、第三金曜日とした。

研究部では、前年度から研究発表校を決定していただき、実践に基づいた中身の濃い分科会での審議を期待して、発表者と連絡を密に取りながら研究を進めてきた。研究主題に迫るため、各分科会の共通事項として、学校経営の実践をとおして、成果と課題を明確にした。そうすることで、分科会に参加した校長先生方の学校経営に活かすことのできる汎用的な実践例となると考えたからである。

本年度は、これまで二度、学習指導要領に関わってこられた文化庁次長合田哲雄氏を講師として迎え、先行き不透明な時代に生きていく子どもたちに必要な資質・能力等について、多くの示唆をいただいた等の声が聞けた。

来年度以降、小学校において、全国、九州大会との研究主題等の整合性を図るべく、大幅に見直しをした。

来年度の県大会は十一月十四日（金）に場所を宝山ホールとその周辺の公共の施設に移して開催予定である。

二　九州・全国の研究大会

令和六年度の九州・全国の研究大会は、次のとおりであった。

□　九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会
名音小　宅間　万能　校長（第一分科会）
佐多小　本田　聡　校長（第四分科会）
宮浦小　馬場　智也　校長（第六分科会）

□　全九州中学校長研究大会宮崎大会
大隅中　馬込　昇　校長（第四分科会）

□　全国連合小学校長会研究協議会徳島大会
発表なし

□　全日本中学校長会研究協議会岩手大会
発表なし

令和七年度は、全連小、九小協は福岡県、全九中は熊本県、全日中は香川県が開催県の予定である。

末筆ではあるが、令和六年度の県内外の研究論文執筆・発表及び分科会運営に御協力いただいた校長先生方にお礼を申し上げたい。

〈人事給与部〉

「令和六年三月の人事・給与に関する意見と令和七年度への要望」及び「教職員の人事評価制度に関する意見・要望」について、全校長にアンケート調査を実施し、その結果を基に、十月二十九日の「県教育委員会への要望説明の会」において、次の点を主に要望した。

一　人事異動について

ア　定年引上げ、新規採用年齢の引上げ等に伴う人事交流の在り方や役職定年の考え方、給与や処遇等について、全ての教職員が意欲をもって勤務できるよう検討されたい。

イ　教員の配置については、未配置とならないよう努められたい。

ウ　標準勤務年数の再検討、地区割りの見直し等を含め、人事異動の標準の見直しについて検討されたい。

二　給与について

ア　教職に魅力を感じられるよう教員の給与の維持・改善に努力されたい。

イ　管理職の給与や手当等については、職責に見合う処遇の改善を図られたい。

三　人事評価制度について

評価者が、公正かつ客観性のある評価を行うため、事例研究を含めた研修を、県・地区がリードして実施されたい。

県教育委員会からは、役職定年後の人事や処遇等の取り扱いについては、国の制度や人事異動の標準に基づきながら、本制度について丁寧に説明していくこと、人事異動の標準については、今後も引き継いでいくとともに、教職員を取り巻く情勢の変化や様々な観点を踏まえ、課題解決を図り、適切な人事異動に努めていくこと、管理職の処遇については、国や知事部局の動向を注視しながら引き続き検討していくとの回答を受けた。

〈広報部〉

令和六年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた活動が円滑に進められたことに感謝いたします。

一　月刊「鹿児島の教育」

「随想」は、県下各地において様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。教育職以外の方々のお考えや思いに触れ、人として生き方の幅を広げることができた。また、会員の提言や実践事例、各種話題等はそれぞれ特色があり、学校経営に生かすとともに、職員・児童生徒への話題としても活用することができた。

二　特集号「鹿児島の教育」第七十号

特別寄稿として、鹿児島大学客員教授の鮫島吉廣氏には、鹿児島の風土と焼酎の歴史の奥深さを、鹿児島大学名誉教授の大木公彦氏には、奄美大島群島を含む琉球列島の大地の成り立ちや生い立ちについて御教示いただいた。その他、多くの会員の先生方の玉稿を掲載できた。

三　「師の道」五十二号・五十三号

本年度は令和五年度に役職（校長職）定年を迎えた皆様とともに令和六年度役職（校長職）定年を迎える皆様にご在職中に原稿執筆を依頼し、九月と三月に二号刊行した。

原稿執筆のサイクルを見直し、次年度以降も八月末までに原稿提出をお願いしたい。

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに敬意を表するとともに、御協力に心から感謝申し上げたい。

編集後記

先日、「小学校～それは小さな社会～」というドキュメンタリー映画を見てきました。日本の公立小学校の生活が描かれたこの映画が、教育大国と呼ばれるフィンランドでヒットを記録しているという新聞記事を読んで興味をもちました。

監督の山崎エマさんはアメリカで働いているときに、「責任感が強いですね。」、「チームワークが得意ですね。」と周りから言われたそうです。自分では普通にしているだけなのに、なぜそう言われるのか考えてみると、日本で受けた小学校六年間の学びに基盤があるからだと気付き、この映画を作ったそうです。

映画の詳細はネタバレになるので控えますが、入学したばかりの一年生が慣れない掃除や給食当番等を通じて成長する姿や、六年生が一年生に手本を見せながら優しく世話をする姿、学校行事に向けてそれまでできなかった演技や演奏ができるようになるまで一生懸命練習する姿に涙が出ました。「特活」という海外にはない日本独自の教育活動が、日本人の責任感や思いやり、使命感等を培っていると改めて実感しました。

また、映画は教師の側にもスポットを当て、教師同士が悩みながら議論を重ね、子供たちのために考え抜いている姿に尊いものを感じました。

よくマスコミ等で、海外と日本の学校を比較し、あたかも日本の学校教育が劣っているかのような報道を目にすることがあります。映画を見終わった後、課題はあるにせよ、人間形成にまで迫る日本の学校教育は世界に誇れるものであると感じたと同時に、そこに携わってこられたことに喜びを感じました。

さて、今年度最後の月刊「鹿児島の教育」二・三月号を皆様のお手元へお届けすることができ、ほっとしています。先の映画で描かれた世界は、鹿児島の学校でも普通に行われていることであり、月刊「鹿児島の教育」には、これら世界に誇る学校教育への熱い思いが、ぎゅっと詰まっています。

ご多用の中、玉稿をお寄せくださいました方々に感謝申し上げます。

前田　浩二（武中学校）